

2024 年度教職研究科 FD 活動「年間まとめ」

(1) 2024 年度の取り組み概要

2024 年度の主な FD 活動は、以下の通りである。

1) 授業評価アンケート

2024 年度も、春・秋 Semester ごとに「授業評価アンケート」を実施した。「授業内容について」「授業の進め方について」「受講生の取組について」の 3 観点 14 項目による数値評価部分について、選択肢の文言をよりわかりやすい表現にする等の改善を図った。学期末に実施した FD 懇談会では、各授業の数値評価結果と、自由記述による授業評価（授業の良いところや改善してほしいところなど）及び自己評価（身に付けることができたことや自身の授業への参加姿勢、今後の課題など）の分析を踏まえ、担当教員からの総括と次年度の改善点等を話し合った。

2) 研究科アンケート

2024 年度も、学年末に「研究科アンケート」を実施した。2023 年度入学生からの新カリキュラム適用者が修了を迎えることから、修了生対象の項目として、院生講師・非常勤講師制度の成果と課題に関する記述欄を新設した。また、オンライン受講制度が 2 年目を迎え、その課題等についても分析できるようにするため、現職院生の属性区分に関する選択肢を対面とオンラインに分けて尋ねることとした。

設問は、在学生全員を対象とした「教育課程について」「授業について」「学生支援について」「全体を通して」の 4 観点 20 項目と、加えて今年度修了生には「教育実践探究論文」の観点 5 項目と入学動機の振り返り及び上述の院生講師・非常勤講師制度に関する記述欄から構成される形となった。

3) FD 調査（他大学調査を含む）

組織的な調査研究（FD 調査）として、2024 年度は「双方向遠隔地授業の方法及びシステム開発」「学部学生の早期履修に関する指導・支援方法の開発」「単位互換制度等の充実に向けた調査」に関する 3 つのテーマについて取り組んだ。1 つには「双方向遠隔地授業の今後の展開」として、特に実習における研究授業及び研究会のオンライン開催及び現職教員の研修への応用の方途を継続して探った。「学部学生の早期履修に関する指導・支援方法の開発」については、2024 年度から開始された早期履修制度利用学生への授業内外でのアプローチの在り方を探るため、利用者への聞き取り調査等により、ニーズの把握と実際の支援を行った。「単位互換制度等の充実に向けた調査」については、現在連携している京都教育大学連合教職大学院に加えて、それ以外の大学との単位互換等を行う領域・時期等の具体的検討を行った。

4) 授業参観

外部への授業公開期間に合わせて、学期ごとに授業参観推奨週間（春学期：6/24～7/5、秋学期：11/4～15）を設け、年間 1 回以上の教員相互の授業参観を実施した（参観は推奨期間以外も随時

可能)。参観した教員は「授業参観報告書【様式 B】」を授業担当者に提出し、それを受けて授業担当の教員が「授業参観受入実施報告書【様式 A】」をまとめ FD 委員会に提出することにより、それぞれが担当授業の在り方について振り返る機会とした。昨年度からオンライン受講制度が開始されたことを踏まえ、引き続きハイフレックス授業（6 限開講科目）の参観（特に遠隔受講生視点からのオンライン参観）を推奨した。

5) 学びのポートフォリオ

2024 年度もカリキュラムの在り方を継続的に検討する材料とするために、院生に「学びのポートフォリオ」の提出を学期ごとに求めた。昨年度からの新カリキュラムの実施を踏まえ、学期間の連続性を重視する視点から、様式を大幅に改訂した。なお、学びのポートフォリオは、院生相互で参照できる。また、教員による「学びのポートフォリオ」の活用状況について報告する「活用票」の提出形式をオンライン上のフォーム入力に改めた。

6) 修了生フォローアップ調査

修了生の勤務状況から本学の教員養成の成果と課題を理解することと、修了生の直面している課題や悩みに関するサポートを行うことを目的として、修了生フォローアップ調査を実施している。2024 年度については、6 期生（2024 年 3 月修了生）を中心に、2024 年春に主に連携及び近隣の教育委員会に正採用された者を対象として修了生フォローアップ調査（訪問調査）を実施した。加えて、2019 年 3 月修了から 5 年が経過した 1 期生について、2 巡目の修了生フォローアップ調査の対象と方法を詳細を決定し、オンラインによる修了生本人のヒアリングを中心に実施した。

7) FD カフェ

教職研究科の教職員が気軽に参加し、授業等で活用することのできる資質・能力を高める機会として、昨年度から新たに「FD カフェ」を企画し、2024 年度も継続的に実施した。オンライン受講制度の開始を踏まえ、引き続き ICT の活用に関するテーマを中心に設定した。

(2) 取り組みの成果と課題

1) 授業評価アンケート・研究科アンケート

- ・ 別紙ファイル参照

2) FD 調査（他大学調査を含む）

「双方向遠隔地授業の方法及びシステム開発」については、遠隔授業推進委員会での検討をベースとしつつ、FD 懇談会等において関連する課題について意見交換を行った。オンラインに加えてオンデマンドを組み合わせた授業の在り方が検討課題となっていたものの、本学がリアルタイム（ライブ）でのオンラインによるハイフレックスな双方向遠隔授業を実施していることに魅力を感じている在学院生の声が多くあることから、当面は現行のオンライン受講制度を前提に、教室内の機器更新や配置の工夫等により、受講人数が増加する中でのさらなる改善・充実を図ることが課題であるという認識に至った。

「学部学生の早期履修に関する指導・支援方法の開発」については、2024 年度の学部 4 回生以

上を対象に早期履修制度の運用が開始されたことを受けて、前述のように授業アンケートを早期履修の学部学生にも実施し、別途分析を行った結果、授業への満足度をはじめとして、極めて良好な回答が得られた。加えて、対象科目の担当教員及び早期履修生への聞き取り調査を行い、学部の履修科目の時間割や教育実習期間及び教員採用試験日程との関係など、学期ごとの早期履修の課題等についてさらなる検討の必要性が見えてきた。また、早期履修した学部生のほとんどが2025年4月の教職研究科への進学を希望しており、実施初年度から学生募集へのつながりという点でも成果が認められる。

「単位互換制度等の充実に向けた調査」については、2023年度からの新カリキュラムにおいて、京都教育大学連合教職大学院との協定により開講されている秋学期のコース共通科目「学校マネジメントの理論と実際」をベースとしながら、その別クラス展開として他大学との単位互換制度を拡充する方向性について学内手続き等の観点から事務的な検討を進めた。その上で、すでに教職大学院における遠隔授業を展開している他大学の教職大学院との情報交換を行い、将来的な単位互換制度の構築に向けて次年度も具体的な協議を継続することとなった。

3) 授業参観

2023年度から開始されたオンライン受講制度の対象となる6限開講の授業を中心として今年度も教員間の授業参観が行われた。引き続き「リモート受講者」と同じ視点でオンライン参観することを推奨し、「音声クリアで、疎外感がない」など、自然なハイフレックス授業を実感する声が寄せられた。また、スプレッドシートなどのオンラインツールの活用における工夫とともに、ITの在り方をめぐる課題等、実質的な授業改善につながる意見等が参観した教員から寄せられた。

4) 学びのポートフォリオ

2024年度から「学びのポートフォリオ」の様式を大幅に改訂し、これまで学期ごとに分かれていたファイルを入学から修了まで継続して使用することとした。1年次の5月に目標の具体化を図った上で、春学期末にその振り返りと秋学期の目標設定を行う形で、時系列的に自己の成長についてメタ認知的に省察できるよう工夫した。また、提出時期についても、他の院生等との交流を踏まえた上で精察を深めるタイミングとする観点から、各学年の発表会や報告会等の節目から1週間以内を目安とする形で運用することとなった。

特に1年次の院生については改訂の目的等が伝わり、期限内の提出率向上などの改善が見られている。今後、2026年度からのMoodle+Rへの移行も見据えて、日常的に学びや気づきをエピソードとしてストックしておくこと、また、発表会等の行事におけるプレゼン資料の一部に組み込むことなど、院生にとっての省察ツールであると同時に、指導教員にとっては院生理解のツールかつ院生とのコミュニケーション・ツールとしても機能しやすい工夫の在り方を引き続き検討する。

5) 修了生フォローアップ調査

修了生に対するフォローアップ調査については、以下の状況である。

- ・ 2019年3月に修了して5年が経過した1期生を対象に、2巡目の調査の実施に入った。役職・校務分掌等の履歴、教職大学院での学びが現場でどのように役立っているか、修了後も学び

続けているかどうか、学会や研究会で発表希望があるか等について、修了後のネットワークづくりの視点を重視して設問を構成した5年経過修了生用の「修了院生ヒアリングシートⅢ」の様式を作成し、原則として教職に就いている修了生を調査対象とし、オンライン等によるヒアリングを中心に実施した。

- ・ 修了から5年が経過する中で、1校目の勤務が続いているケースから他県に異動したケースまでキャリアパスは様々であるが、それぞれに学会等での研究発表や各種研修講師、論文執筆による受賞、校内でのプロジェクトのリーダーなど、若手・新人としては顕著な業績が認められている。教職大学院でもっと学んでおきたかった内容については、2023年度のカリキュラム改革で重視した特別支援教育や学校マネジメントに関する内容、教科指導等があげられていることも特徴といえる。また、一部は訪問調査を行い、管理職からのヒアリングから、授業に関する生徒アンケートで極めて高い評価を受けていること、40代の教員がほとんどいない中でリーダー的な役割を果たしていることなど、本人調査と整合する評価が得られた。
- ・ 直近の修了生を対象とする調査においては、本人及び管理職からのヒアリングを行うため、訪問調査を中心に実施した。初任者研修の中で代表して研究授業の実施者となるなど、それぞれに日々の実践において大学院時代の学びが活用されている様子が窺われ、特に所属コースにおける学びが軸足となっていることが推察される。一方で、大学院時代にもっと学んでおきたかった内容としては、所属コース以外の専門的な内容や研修校と異なる校種の課題等があげられており、在学中の学びの幅を広げる履修指導の在り方について、さらなる検討と充実が望まれる。
- ・ 管理職からのヒアリングでは、修了生により具体的な評価内容は分かれるが、生徒指導力や職務遂行力を中心に優れているとの評価が得られている傾向にあり、加えて授業力等についても高い評価を得ている修了生がいた。一方、必ずしも修了生本人に限定されない教職大学院への期待としては、報告・連絡・相談といった社会人としての基本的な行動や上の世代の教員との協働を含む関係性・同僚性の獲得を期待する意見も見られた。個人の資質・成長という点では教職大学院の学びだけに還元できない課題も含まれるが、カリキュラム全体を通して教職キャリア形成における研究と修養の意味について考え続けるような一層の働きかけが求められる。

6)FD カフェ

昨年度の4回の企画に続き、今年度は計3回のFDカフェを企画・開催した。第1回(9月25日(水))は「Moodleのイメージ」(参加9名)、第2回(2月12日(水))は「Adobeソフトウェアの活用可能性」(同10名)、第3回(3/19)「中教審の動向」(本稿執筆現在計画中)を取り上げた。教員と職員の双方が参加した企画もあり、教職協働の推進にも寄与している。

(3) 次年度に向けて

組織的な調査研究(FD調査)として、2025年度は「双方向遠隔地授業の方法及びシステム開発」「学部学生の早期履修に関する指導・支援方法の開発」「単位互換制度等の充実に向けた調査」に関する3つのテーマについて取り組む。

「双方向遠隔地授業の方法及びシステム開発」については、オンライン受講制度適用の院生が

初めて修了予定年度を迎えるに当たり、実習（教職専門研修）における研究授業及び研究会のオンライン開催等、現職教員の研修への応用の方途を継続して探る。

「学部学生の早期履修に関する指導・支援方法の開発」については、2024年度に開始された早期履修制度利用学生への授業内外でのアプローチの在り方を引き続き探る。2025年度は特に前年度の利用者が実際に教職研究科に入学することが見込まれるため、聞き取り調査等により、入学後のメリットを含めた効果の把握と課題点の洗い出しを進め、早期履修中の学部学生への支援の在り方等についても引き続き検討する。

「単位互換制度等の充実に向けた調査」については、現在連携している京都教育大学連合教職大学院との単位互換制度の継続を前提として、新たな別の教職大学院との単位互換制度の創設に向けて、最短で2026年度からの開始を見通した具体化を進める。

授業アンケート、研究科アンケート、「学びのポートフォリオ」とその活用、授業参観、FDカフェについては、今年度までの取り組みで明らかになった成果と課題を踏まえた上で、それぞれの様式及び観点等の継続的な見直しを進めながら実施する。また、FDカフェでは、manaba+R から moodle+R への移行に向けて、さらなる情報交換等の機会を設けるとともに、多様なテーマの発掘と教職員間の交流の促進に努める。